

聖霊降臨節第 20 主日礼拝説教要旨(10 月 19 日)

『信仰と行い』 ヤコブの手紙 2:14-26 早川 真牧師

今朝の個所でヤコブは、信仰と行いの関係について語っています。信仰に行いが伴わなければ、そのような信仰はその人自身を救うことができないと言っています。この信仰と行いの関係は、薬を飲むことにたとえると分かりやすいと思います。私たちは病院に行く時、医者を信頼して処方された薬を飲みます。病院に行って薬をもらっても、どうせ効かないだろうと思って飲まなければ、病気が治ることはありません。その薬を信頼して飲む時に病気は治ります。信仰も同じで神に信頼して神の御心を行う時に救われると言えます。

ヤコブは、もし明らかに助けが必要な人がいる場合に、助けを与えず、言葉をかけるだけであれば、それはその人にとって役に立たないと言っています。「温まりなさい」、「満腹するまで食べなさい」、というのであれば、何か温まるもの、食べられるものを用意する必要があります。その上で、これらの言葉をかけるのでなければその人にとっては絵に描いた餅のように、ただ空しい響きにしかならないということになります。同じように信仰も、口では信じると言いつつも実際に行っていないければ、それは空しいものとなってしまいます。

教会の暦の上では、今週は聖霊降臨節の最後の週で、次週からは降誕前となります。降誕前は、クリスマスに向けて御子イエス・キリストが地上に来られるための備えを為していく期間です。聖霊は私たちに命を与え、信仰に行いが伴うように絶えず働いています。私たちの心の内に働く聖霊の息吹に押し出されつつ、行いを伴う信仰を持って、御子イエス・キリストのお生まれに備えてまいりたいと思います。